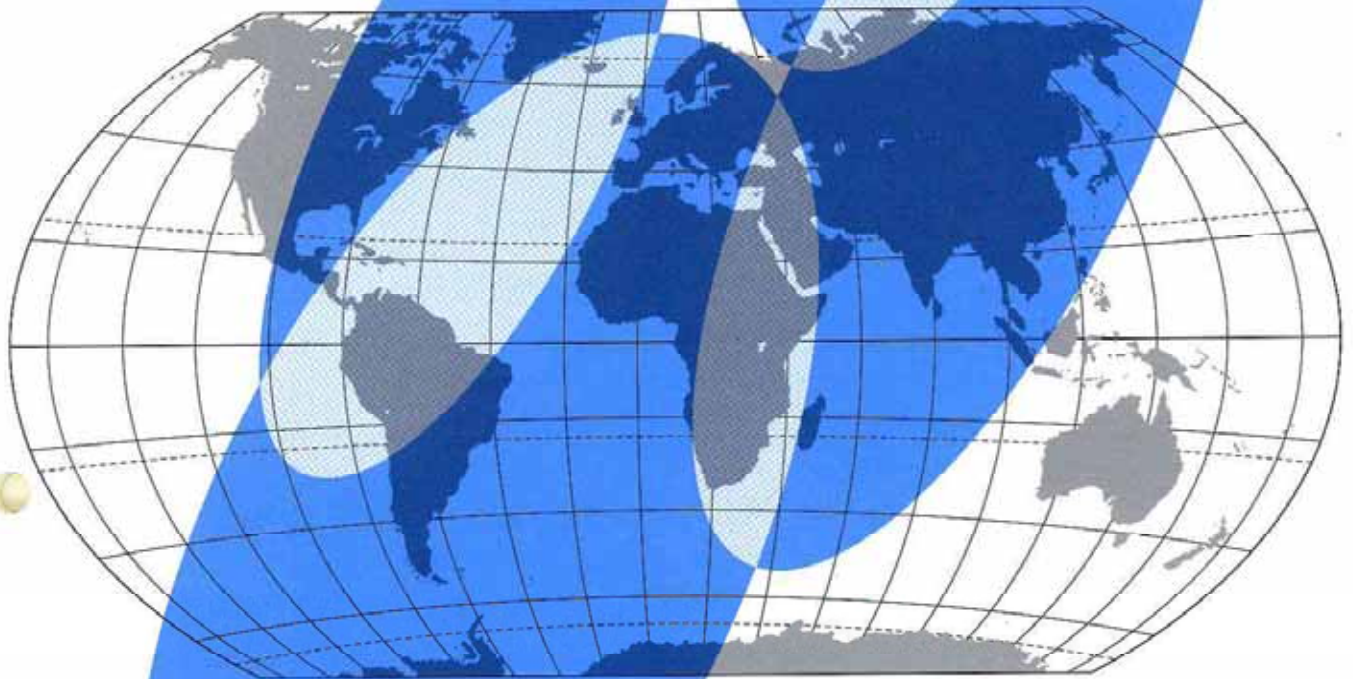




ISSN 0288-6332

東北開発研究

'08 夏季号 No.149



●特集 / 第10回東開研セミナー
東北の新しい地域政策を求めて

財団法人 **東北開発研究センター**
Tohoku Regional Development Research Center

《目次》

「東北開発研究」

2008
夏季号
No.149

特集

第10回東開研セミナー
東北の新しい地域政策を求めて
—グローバル化・人口減少期への
民業・生活からの対応と方策—

.....元大阪産業大学教授 今野 修平 2

-
- ビュー 東北開発における学都仙台コンソーシアムの役割
学校法人 東北学院学院長、東北学院大学学長 星宮 望..... 1
 - 調査研究報告書概要1 東北におけるスポーツ交流と地域活性化
前 (財)東北開発研究センター調査研究部主任研究員 千葉 眞樹.....20
 - 調査研究報告書概要2 東北における企業の持続的発展
(財)東北開発研究センター調査研究部主任研究員 木村 和也.....40
 - リレーサロン 水辺のまちづくり—物語をつくり、それを記憶化すること—
NPO法人 新潟水辺の会代表世話人 大熊 孝.....55
 - 山紫水明 人口減少下における地域の諸問題と活力維持のあり方
(財)東北開発研究センター常務理事 事務局長 関口 哲雄.....59
 - スコープ 国土形成計画と道州制を巡る動き.....63
 - 受入文献紹介.....65
 - 事務局から.....66

(敬称略)



水辺のまちづくり

—物語をつくり、それを記憶化すること—

NPO法人 新潟水辺の会代表世話人
新潟大学名誉教授

大熊 孝

最近、各地で市民参加型の「まちづくり」や「川づくり」が行われ、それなりに良い環境が生み出されてきているが、そのことをどのように評価し、本質的にどう考えたらいいかのかがよく分からなかった。しかし、新潟の市街地を流れる栗ノ木川での、落下防止用のフェンスを取り外した事例が大変興味深く、そのプロセスから「物語」として「記憶」に残ることが重要なのだということを感じたので、それを報告しておきたい。

栗ノ木川は、信濃川に河口付近で注ぐ通船川（この川筋がかつての阿賀野川である）の支川で、川幅は10mから20mの、市街地を流れる小河川である。この川は、地盤沈下で水が流れず、工場排水が入り込み、かつては汚濁河川の代表のように言われた川であったが、今では浄化用水の導入によって水質も少しは良くなってきている。その右岸沿いには緑地帯があり、約30種類の樹木とともに桜が200本近く植えられている。しかし、護岸は鋼矢板の直壁護岸で落ちたら這い上がれない構造で、高い金網フェンスで緑地帯と川とは分断されている。この構造は、昭和39年の新潟地震で液状化による大きな被害を受けた後の改修工事で造られたものであるが、当時の技術

思想が、緑地帯を造りながらも、治水的な観点でしか技術展開できず、縦割り行政の効率一辺倒で、川と人とを切り離すものでしかなかったことを如実に示している。

その鋼矢板も30数年経ち、至るところで腐り、穴があくという状況になっており、再改修の必要性が出てきた。ちょうど平成9年に、河川法の改正があり、市民参加で改修方針を検討することが可能となり、新潟県は、平成10年6月、通船川・栗ノ木川の将来のあり方を検討・提案することを目的に、市民、企業、学識経験者、行政、河川管理者などが自由に参加し議論する場として、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議を立ち上げた。この会長には、新潟大学工学部教授であった私が就任し、今までさまざまな活動を通じて、通船川・栗ノ木川の再生に取り組んできている。

その再生の一例がこのフェンスの取り外しであるが、この発端は栗ノ木川沿いの沼垂小学校の総合学習にあった。子供達が川の総合学習を進めるうちに、このフェンスを取り、川と緑地帯を一体にして欲しいという希望が出されたのであった。それを聞いた地域の大人達が、その実現は夢かもしれないが、まずは実情を広く知ってもらいたいと、地域住民

が主体となった「さくら祭り」が平成16年4月から始められた。この祭りでは歌や踊りのほか、フリーマーケットや屋台が並び、カヌーや舟の体験乗船が行われ、毎年数千人の人出がある。ただ、体験乗船する舟に乗るにも、写真1のようにガードレールを跨ぐしかない状況であった。

そうした中、平成18年3月に、新潟県が予算を工面して30mの区間だけフェンスを取り外し、円形の階段護岸を造成し、新潟市が照明設備を設置したのであった。子供達も植栽などの作業を手伝い、ここを「水とみどりの広場」と名付けた。平成18年のさくら祭りは、写真2のように、ここで行うことができたのであった。その後、子供達は通学の行き帰りにここで亀や魚と戯れており、夏には松明の下で、舞踏鑑賞会が開催されたりしている。

無論、平成20年の第5回さくら祭りも盛大にここで行われた。

このフェンスの取り外しは、安全性の観点からは許されないことである。実は、この円形階段護岸のすぐ近くの緑地帯には、昭和45年に栗ノ木川で溺死した小学生2人を追悼した石碑が建てられている。しかし、この事実を前提としながら、子供達、小学校の教員、地域住民、行政が徹底的に議論する中で、落ちても這い上げられる構造にし、浮き輪を常備するなど、安全対策が講じられる中で、このフェンスの取り外しが行われたのであった。ちなみに、栗ノ木川沿いは住宅が密集しており、子供達が階段護岸で遊んでいる様子は、誰か彼かの目にとまる状況下にあることも、その取り外しに幸いしたといえる。

ともかく、このフェンスの取り外しは、子



写真1・舟に乗るにもガードレールを跨ぐなければならない状況 (2005年4月24日)

供達の総合学習から始まったわけであり、第3回さくら祭り開会式に、その代表の挨拶があったが、おそらくこの子供達はこのことを深く記憶し、大人になっても自分の子供や孫にも伝えていくに違いない。換言すれば、物語がつくれ、記憶化され、それが少なくとも100年は伝えられることになったのである。このことは、「まちづくり」や「川づくり」の本質が、出来上がった完成形でなく、そのプロセスが「物語」として「記憶」され、それがコミュニティのアイデンティティを形づ

くることにあるということを教えてくれた。すなわち、「まちづくり」、「川づくり」には、“記憶される環境の創造”が重要ということである。今までの「まちづくり」、「川づくり」では、生産や生活の機能性・効率性ばかりが追求されてきた。これからは“記憶される環境の創造”という点に注意を払う必要があると考える。

「記憶」こそが、人を人として成長させ、人生を豊かにするものといえよう。



写真2・フェンスが30mだけ取り外された状況での栗ノ木川さくら祭り（2006年4月23日）

《略 歴》

大熊 孝 (おおくま たかし) 氏

1942年8月 台北市生まれ。引き揚げ後、高松、千葉、長岡、新潟に住む。

東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、新潟大学工学部助手に着任、講師、助教授、教授を経て、2008年3月定年退職、同4月新潟大学名誉教授。

専門は河川工学、土木史。自然と人間の関係がどうあればいいのかを、川を通して研究しており、川の自然環境を守るとともに、治水・利水のあり方を地域住民の立場を尊重しながら考察している。

著書に、「利根川治水の変遷と水害」(東大出版会、1981)、「洪水と治水の河川史」(平凡社、1988)、「日本土木史」(技報堂、1994、共著)、「川を制した近代技術」(平凡社、1994、編著)、「川がつくった川・人がつくった川」(ポプラ社、1995)、「日本のダムを考える」(岩波ブックレット、1995、共著)、「技術にも自治がある—治水技術の伝統と近代—」(農文協、2004)、「首都圏の水があふない—利根川の治水・利水・環境は、いま—」(岩波ブックレット、2007、共著) などがある。

- ・岩国城下町エリアの文化的景観等検討委員会委員長
- ・黒部川ダム排砂評価委員会委員、信濃川中流域水環境改善検討委員会委員
- ・NPO法人新潟水辺の会(代表)、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議(会長)、水郷水都全国会議(共同代表)、日本河川開発調査会(理事)、日本自然保護協会(評議員)、日本野鳥の会(学術顧問)、(財)こしじ水と緑の会(理事)、(財)C.W.ニコル・アフエンの森財団(評議員)、(財)日本科学協会(評議員)